

学位論文題名

黒沢清と〈断続〉の映画

学位論文内容の要旨

本博士論文は、現代日本を代表する映画作家である黒沢清監督の作品における「関係」の諸相を分析するものである。本論の目的は、黒沢清の六作品についての仔細な分析を通して、黒沢のフィルモグラフィ全体に流れる思考のありようを「関係」という主題のもとに析出し、そこから、黒沢の映画がもつある種の現代性、そして映画それ自体とそれを「見る」ことに対する原理的な問いを見出すことである。

第一章では、『CURE』のいくつかのシーンを契機として作品の外へ踏み出し、そこに仄めかされている「関係」の主題を系譜的に跡づける作業を行なった。メスメリズム、複製メディア、心霊主義、オウム真理教、『怪人マブゼ博士 (マブゼ博士の遺言)』(フリッツ・ラング監督、一九三二年)といった様々な文脈を寄せ集め、そこに「距離を介した直接性/距離を介した接触」と「イメージと音声の分離」という主題を見出すことによって、『CURE』を分析するための前提を提示するとともに、本論文全体に関わる「断続」と「いかがわしさ」のモチーフを多角的に明らかにした。

第二章では、第一章の議論を踏まえて、『CURE』における「断続」と「関係」の諸相を詳細に分析した。とりわけ催眠の場面における二者関係に注目し、そこにショットとショット、音とイメージの「断続」が折り重なっていること、そしてそのことによって「関係」の不気味な変容と力の行使が実現されているさまを論じた。またそこから、この映画における「関係」の重層性が複製メディア的な媒介の「いかがわしさ」とともにあり、その意味でこの作品では、第一章で見出された主題が映画に内在する問題として再展開されていることを明らかにした。

『CURE』の人物の行動は、つねに外在的な「関係」に取り囲まれている。第一部の結論では、ジル・ドゥルーズの「関係の映画」(『シネマ1』)という概念を援用しながら、この映画に現れている特異な存在様態を明確にし、われわれの「見る」ことに対する問いを再提出している。

第二部の三つの章では、「幽霊」や「分身」といった〈非-人間〉が登場するホラー作品を取り上げた。これらは、一九九〇年代以降のいわゆる「ジャパニーズ・ホラー」の流れのなかで生まれた作品群である。第二部では、この「ジャパニーズ・ホラー」における幽霊表象の方法論を詳しく論じ、〈非-人間〉の根拠を問うことがひとつの焦点となっている。〈非-人間〉を、「人間」という根拠を介することなく出現させることはできるのか。あるいは、「人間」がそのまま〈非-人間〉であるような存在様態を実現することは可能なのか。「ホラー」という二項対立的な形式をその臨界まで追いやってしまうだろうこうした存在を、黒沢はまさに「断続」によって招き寄せようとしている。第二部の三つの章では、以上のことを具体的な分析によって明らかにした。

第三章では、『回路』(二〇〇〇年)に現れる「人間が壁の染みになる」という形象に着目し、その変容が、映画それ自体が孕む非決定性の現れとともに起こっていることを明らかにし、そこに「幽霊」と「人間」という二項対立から逃れる中間的なありようの可能性を見出した。ここでは、その中間的な存在が「断続」の無根拠と重なりあい、そのことによって、われわれの「見る」という体験もまた二重化されていると結論づける。

第四章では、『降霊』(一九九九年)を取り上げ、この作品が「ジャパニーズ・ホラー」の方法論を意識的に取り込みつつ、「幽霊」という意味づけを様々なかたちで揺らがせ、その恣意性を顕在化させていること、さらに「分身」が登場させることで、〈非-人間〉とその根拠としての「もとの人間」との関係、荒唐無稽な反転可能性を孕む表層的な関係へと変容させていることを明らかにした。ここに現れているのも、映画というメディアの「断続」的な「いかかわしさ」と関わることで露呈される存在の無根拠ともいうべき諸相である。

第五章では、『ドッペルゲンガー』(二〇〇二年)について論じた。ここではまず、「分身」を表象するための二種の根拠づけ(並置と交代)を確認したうえで、『ドッペルゲンガー』がその方法を律儀に実践しながら、そこに「分割画面」や「瞬間移動」や「生き返り」といった「断続」を様々に介入させて亀裂を遍在させていくさまを分析した。最終的にこの映画は、ひとりの人間がそのまま二重化し、ひとつの身体がそのまま他であるような可能性、つまり「根拠なき分身」の可能性を垣間見せる。しかしそれは同時に、イメージを根拠から解放することとともに現れているのであり、この二重の解放が、新たな存在様態とその生へのヴィジョンを示している。

以上の第二部において明らかになるのは、黒沢の映画がいかに「ホラー」から離脱しているかということである。これらの作品は、「ジャパニーズ・ホラー」の問題系、あるいは「ホラ

一」的な二項対立から出発しながら、それらを攪乱している。そこに現れる〈非-人間〉の「無根拠」は、映画それ自体の「無根拠」の場において現れており、そのためそれは、〈非-人間〉の「恐怖」ではなく、〈非-人間〉への「解放」として見えてくることになるだろう。

黒沢はその後、ある種の転回を見せている。『LOFT』（二〇〇五年）と『叫』（二〇〇六年）では、つねに過去を捨てようとし、根拠からの解放を目指していたはずの黒沢作品が、「過去」を積極的に取り上げ、それを引き受けようとしているように見える。第三部では、この二作品を分析し、「過去」との関係がいかなる様相を示しているかを論じた。

第六章ではまず、映画と「過去」に対する黒沢自身の思考を確認した。その考えは、「取り返しをつかなさ」という言葉に集約される。映画に映っているのは取り返しをつかない過去であり、しかも映画はそれを取り返しをつかないかたちで捨てていく。黒沢の思考においてこれは、ホラーの根本とも関わりながら、「見ることの無力」という主題を形成している。『LOFT』は、その無力さから出発しつつ、回想と夢によって過去の映像を導入してみせるが、この章ではそのフラッシュバックの分析によって、しかしそれは人称的な回想に回収されるものではなく、「光の変化」という視覚的類似と反復によって、過去を現在に出会わせるものであることを明確にした。

第七章では、『叫』における幽霊との出会い、そしてそのことによって引き起こされるフラッシュバックの様態について詳細な考察をおこなっている。そこで幽霊が「イメージ」として現れていること、そしてそこで回想が奇妙な「断続」に巻き込まれていることを分析し、過去の回想が「出会い」として展開され、過去への贖いの可能性が、その「断続」のなかにこそ見出されていることを明らかにした。

以上の第三部では、「断続」に身を委ねることによって、イメージを「見る」ことが「無力」から「可能性」へと転じるということ、その契機の在り処を論究している。

# 学位論文審査の要旨

主 査 准教授 応 雄  
副 査 教 授 押 野 武 志  
教 授 武 田 雅 哉

学位論文題名

## 黒沢清と〈断続〉の映画

本論文は、すでに世界的に認知されている現代日本を代表する映画作家、黒沢清監督の作品における「関係」の諸相を分析するものである。一九八三年に商業映画デビューした黒沢清は、現在までに五〇本以上の作品を監督しているが、本論ではそのうち、「ホラー」に分類することのできる『CURE』以降の六つの作品を取り上げる。ここで課題となっているのは、「恐怖」それ自体ではなく、「ホラー」という形式を出発点とすることによって、黒沢の映画が何を目指し、何を思考しているかという点である。本論はその思考の主題を、「関係」という言葉によって規定する。黒沢において「ホラー」とは、「関係」の不可逆的な変容の物語であり、その主題をもっとも体現する場である。本論の目的は、六作品の仔細な分析を通して、黒沢のフィルモグラフィー全体に流れる思考のありようを「関係」という主題のもとに析出し、そこから、黒沢の映画がもつある種の現代性、そして映画それ自体とそれを「見る」ことに対する原理的な問いを見出すことである。

ここで問われる「関係」は、物語内で描かれる関係に限るものではない。黒沢清の作品の特異性は、作中の関係と重なりあうかたちで、映画というメディアそれ自体における「関係」が思考されているという点にある。本論は、その映画自体の関係のありようを、「断続」という言葉で表現する。断絶と接続が同居していること。つながっていると同時に切り離されてもいるということ。映画というメディアには、こうした「断続」が様々なレベルで介入している。イメージとその指示対象とのあいだで。ショットとショット、コマとコマとのあいだで。そしてイメージと音声とのあいだで。そして黒沢の作品においては、作中で描かれる「関係」に、こうした「断続」が不可分なかたちで折り重ねられている。よって、本論の作品分析においては、作中の「関係」と映画それ自体の「関係」が重層する局面に焦点を当て、そこから明らかになる作品に内在する論理を明らかにするということが、基本的な方法となっている。

「断続」が呼び込むのは、キャラクターの一貫性や物語時空の連続性の攪乱である。そこではそうした一貫性の解体可能性が示され、「どうにでもなりうる」という事態が顕在化する。しかし同時にそれらは、何らかのかたちで接続（再構成）されてもいる。実は、黒沢の映画では、連続性や一貫性を解体され、ばらばらになった存在は、そのまま肯定され、新たな生の可能性として提示されてもいる。結論では、黒沢の作品群が見せているのが、「断続」に身

を委ねることによって現れるそうした新たな「生」への可能性であり、新たな存在への問いであることを示した。

本論文の研究成果は以下の2点にまとめることができる。

①怪物であれ、宇宙からの未確認生物であれ、あるいは殺人鬼であれ、ホラーのドラマは基本的に、「人間」あるいはその「正常さ」と「他者」あるいはその「異常さ」との対立によって構築されてきたといえる。それゆえ、ホラーをめぐる従来の研究や批評においては、その「他者」の位置に誰が定位され、そこで生まれる恐怖や対立がいかにかにイデオロギー的な対立図式と結託しているかという点が問題となってきた。いっぽう、「ジャパニーズ・ホラー」と呼ばれる現代日本ホラー映画は、「幽霊が襲ってくるから怖い」というこの映画ジャンルにおけるオーソドックスな手法から脱却し、「顔を見せない」「動きが非人間的」「しゃべらない」など、いかに役者である人間から「人間らしさ」を抜き取っていくことによって、「人間ならざるもの」を現出させるかという点にこだわってきたが、「人間らしさ」を基準とする引き算によって作り出される「幽霊」は、結局「人間」と「非人間」の二項対立を温存させてしまう。そうした先行研究や映画実践の諸問題を整理したうえで、本論文は、黒沢清映画を、二項対立を無効化しようとする、「ジャパニーズ・ホラー」をリミットまで推し進めたものとして捉える。とりわけ『ドッペルゲンガー』についての考察などの章に見られるように、人物が自らの分身に付き纏われてしまうが、最終的な局面においては、人物の分身は、そのオリジナルである人間に準拠せず、「根拠なき分身」として登場するようになり、周囲の者からもそのまま訝らずに受け入れられてしまう。こうした虚と実、真と偽を超えたより根本的な存在論の次元を黒沢清の映画に見出した本論文は、ホラーという映画ジャンルに関する従来の研究を大きく刷新したものと評価できよう。

②作品を発表し続けている現代の映画作家を研究対象とするこの論文は、直接この作家についてのまとまった研究が極めて少ない現状のなか、とりわけ研究者の鋭い感性と理論的問題を発見する力が問われるものである。本論文は、映画研究領域のこれまでの諸成果を動員しながら、黒沢清の作品にストレートに向き合おうとして、多角度による詳細周到なテキスト分析を行なっている。論文中に取り上げられた六作品に対して、人物や物語、表現手法から、映画史的文脈との関連、作品が到達した思考まで、各項目を系統的な一貫性を持つ諸ファクターとして緻密な解剖を施したうえで問題を析出した本論文は、黒沢清映画に関するはじめての本格的な研究として空白を埋めるだけでなく、その分析の綿密さと徹底さから、これからの黒沢清研究、ひいては「ジャパニーズ・ホラー」の研究においては、参照されるべきひとつの指標となりうる。

但し、問題がないわけではない。本論文は、ジャック・デリダやジル・ドゥルーズなどによる現代思想や現代映画理論の諸思考を援用しながら、研究対象について踏み込んだ考察を試みている。それは評価すべき点であるが、そこから得られた成果を黒沢清映画の一部のみに当てはめるだけでなく、黒沢映画全体、さらには現代映画理論の再構築という理論化の作業へと向かわせる可能性を示しながらも、その分析はやや足りないように思われる。それと関連して、黒沢清映画における「断続」と「関係」の問題をより重層的なかたちで理論的に再分節化するという課題も残っている。しかし、そういった問題点は、本論文が有する理

論的射程の長さや研究課題の新規性に由来し、この研究がなされてからはじめて浮上しうるものであり、本論文が達成した成果を損なうものではない。本論文のいくつかの章の内容が既発表の論文をもとにまとめられているが、全国学会誌論文を含むこれらの論文は、学会などで高く評価されており、今年4月より日本学術振興会特別研究員として、新しい研究活動を再出発している申請者が若手映画研究者として注目されるきっかけともなった。

本審査委員会は、口頭試問を実施し、5回の審査委員会会議を開いて審査を重ねた結果、全員一致して本申請論文が博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいものであると認定した。